

ストに関する議論や特に13世紀の司教令をめぐる司牧の発展についての記述は厚くないため、主として宗教史の研究成果による補強も必要である。しかし、

本書の出版は画期的であり、これを機に文学・歴史学の両方からさらなる研究が行われることが期待される。
(西川 雄太)

Eva MYRDAL (ed.),

Asia and Scandinavia: New Perspectives on the Early Medieval Silk Roads
[The Bulletin of the Museum of the Far Eastern Antiquities, 81],

Stockholm, The Museum of the Far Eastern Antiquities, 2020, 224p.

ヴァイキングの東方拡大に関しては、ここ20年の間に東欧、ルーシ、ビザンツ帝国さらにイスラームとの関係それぞれに膨大な成果が届けられている。以前は、文字史料が一定程度伝来するイングランドやフランク王国といった西欧やアメリカ大陸に至る北大西洋世界との関係に研究が集中していたが（冷戦と無関係とは言えない）、西欧、北欧、東欧・ロシアの研究者の研究交流が密になる中で、とりわけ東側諸国で海外に開示されていなかった考古学資料に基づく「ヴァイキング世界」の実体解明が急速に進展した。それらの学術成果に基づき東方世界の河川網を遊弋するヴァイキングの活動実態を一般向けに叙述した Cat Jarman, *River Kings: A New History of the Viking from Scandinavia to the Silk Road* (London, 2021) はベストセラーとなった。2015年の国際会議を基にした本論集は、こうした「ヴァイキング世界」をさらにこえて、北欧とシルクロードより先のアジアとの関係を探ろうとしているという点でエポックメイキングな学術的意義を持つ。

編者エヴァ・ミュルダールによる序文「アジアと北欧」では、近年のシルクロード研究（海のシルクロードを含む）を振り返り、考古学的発見の相次ぐ北欧を初期中世ユーラシア交易路に位置付けようとする。英国のシルクロード学者スーザン・ウィットフィールドによる「拡大するシルクロード：ユネスコと一帯一路」では、政治的意図を持つ中国側の一帯一路との微妙な関係を念頭におきながら、ウィットフォーゲル以来のシルクロード研究を振り返る。ウィットフィールドは日本語にも通じており、東洋学が蓄積した西域研究の成果も取り込んでいる。シャーロッテ・ヘーゼンシェーナ＝ジョンソン「隣人としてのアジアと共に」は、本論集の白眉である。「ヴァイキング時代と唐朝における北欧と中央アジア間の接触」という副題にもあるように、ユーラシアの両端の世界の接触（可能性）を、考古学発掘物から推論する。著者は、ヘリエーで発見された著名な

アフガニスタンの仏像のみならず、絹やガーネットを検討することで、単なるものの交換にとどまることなく、「意図を持った輸入物」という観点で北欧とアジアの接触を論じる。エヴァ・アンデション・ストランド「織物と旅すること」は、ヴァイキングの墓地で発見された衣類の痕跡を分析し、それがビザンツ帝国をはじめとする東方世界で生産されたものであることを論証する。ポー・タオ「チベット西部の古代絹」は、新疆で発掘された絹を分析する一方で、アニカ・ラーション「北欧ヴァイキング時代の墓地におけるアジアの絹」は、ビルカとヴェルスエールデの墓地で発見された絹を分析し、絹の生産地が変化したことを論じる。郭物「中国で発掘された古代琥珀製品概観」は、唐から遼にかけて発見された琥珀がバルト海から間接的に中国に到達した可能性を示す。ヤンケン・ミュルダール「シルクロードの技術転移」は、手押し車・バター攪拌機・鼠取りという農業技術が中国から西欧がどのように移転されたのかを理論面並びに考古遺物から推論する。

以上紹介した本論集の議論の多くは、可能な限りのデータは収集しているものの、結論は推論の域を出ないものが多い。しかし、とりわけ絹や琥珀に関しては今後も各地から現物が発見される可能性の高いことを考えると、従来直接証拠にこだわってきたがゆえに深くは踏み込まなかったヴァイキング時代におけるユーラシア東西の交流に関する議論がより深められていくことが予想される。他方で本論集は、発掘が求められるユーラシアの中央部が中国、中央アジア諸国、ロシアなどといった、現在進行形の国際政治に翻弄される地域であることもわたしたちに思い起こさせる。ウィットフィールドが一帯一路に触れつつ、中国の拡大主義的意図を批判することなく論考のタイトルとして採用したことは、シルクロード研究の持つ不安定さを象徴しているようでもある。いずれにせよ本論集が開く可能性は小さくはない。

(小澤 実)